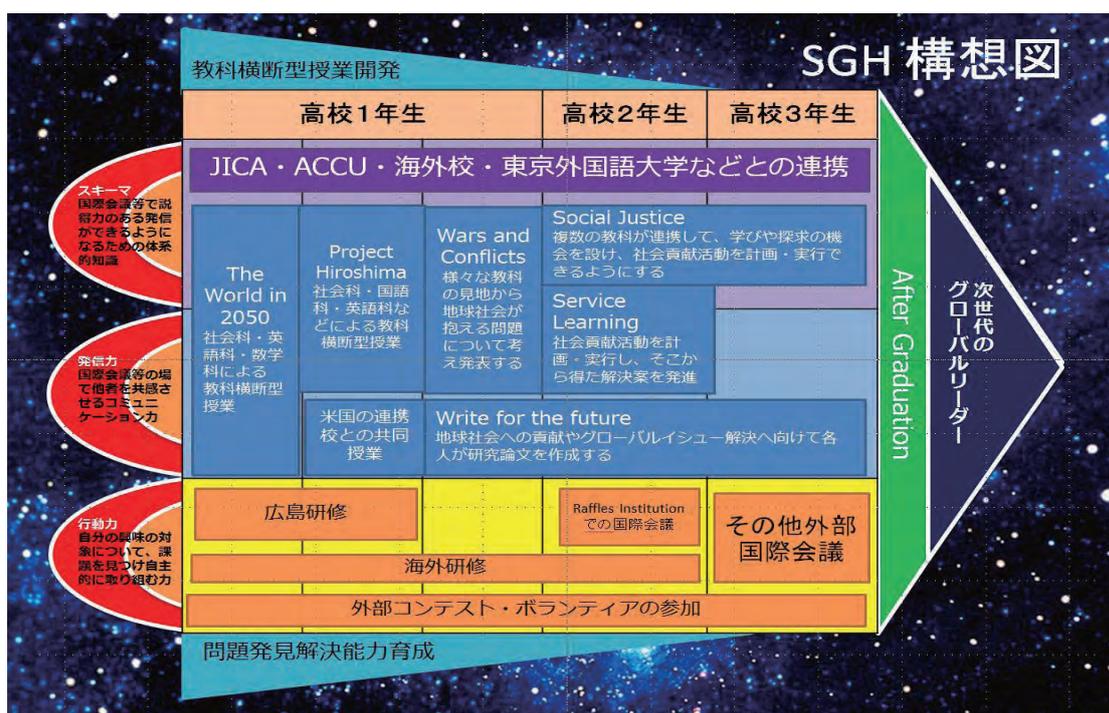


渋谷教育学園渋谷高等学校

探究型学習を、いかにして 「行動できるリーダーの育成」につなげるか

【構想の概要】

複数教科・科目から学ぶアプローチと、問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図った。「人の安全保障」をテーマとした。



業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
The World in 2020 (高1)	←			→								
Project HIROSHIMA (高1)	←											→
Wars and Conflict (高1)										←		→
Social Justice (高2)	←											→
Service Learning (高2)		←									→	
修学旅行プロジェクト (高2)							←	→				
Write for the Future (高3)	←			→								
高校生会議 (全学年)	←											→
大学による評価会 (教職員)				↔								↔
運営指導委員会 (教職員)	↔									↔		
報告書作成 (教職員)										↔	↔	↔

「グローバル・イシューに対する基礎的な知識の習得、自ら課題を発見する強い好奇心、ものごとを多角的に検証し課題を解決に導く思考力、コミュニケーション能力や行動力を備えた人材の育成」を目的、「海外の高校生との議論を通して自分自身について考え、新たな行動の動機付けにつなげることを」目標とし、全学年全生徒を対象に実施した。

実績の説明

本校におけるSGHは、全校生徒が参加する教科横断型自調自考授業を中心に、地球社会が抱えている課題（平和、人権、環境など）に取り組むことを基本とした。その探究活動を通じて、課題解決に向けての方策を考え実践できる力を身に付けるために、次のようなプロジェクトを実施した。

① The World in 2050

高校1年生対象・1学期。中学までの地理・歴史・公民の学習内容を「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ、『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を導入として用いた。また、昨今の緊張する世界情勢から、より多くの報道記事を教材として活用した。授業の中では、グローバル化する世界の中の日本、特に女性の人権と社会参加に関わる課題を取り上げ、よりよい社会を築くためにどのように行動していくのが良いか、互いに意見を述べ合い、考えを深めた。また、緊迫するアジア情勢を取り上げ、二国間の課題、多国間の課題の違いを理解し、問題解決の手法についてまとめた。少子高齢化やAIの進歩を取り上げ、その問題を自分との関わりで整理し、論点をまとめた。連携大学から海外の女性研究者を招き、その方を特別講師として授業を行った。（公民科）

公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに、内容に関する更なる調査を行い、それをもとに、プレゼンテーションやディベートを行った後、エッセイとして完成させた。（英語科）

② Project Hiroshima

高校1年生対象・年間。広島への研修とその前後の期間に、戦争・紛争や平和についての価値観の文化間比較を通して、「人間の安全保障」について多角的に理解を深めると共に、英語を用いて「広島」を発信する方法を実践的に学び、海外校での発表の機会を設けた。

図書館の資料やインターネットを利用して、広島について調べ、その情報を精査し、発信力を高める授業を行った。（情報科・1学期）

戦後の安全保障政策の理想と現実の3つの視点

（投下容認派・核抑止派・核廃止派）から考察し、それぞれに立場を交換しながら、ディスカッションを行うことで、理解を深めた。また、ヒロシマ・ナガサキを出発点に現地でのフィールドワーク（ボランティアガイドを依頼した碑めぐりや語り部さんとの交流等を含む）を行い、ヒロシマに対する思いを理解し、自分たちに何が出来るかを考え、発表した。また、過去と現在をつなぐため、アジア地域における核保有の問題も取り上げ、将来にむけてどのように行動したいかと考える機会も設けた。（公民科・2学期）

連携校である St. Stephen's Episcopal School（以下 SSES）と連携し、現地での研修で学んだことをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し、SSESの生徒たちの意見や評価を得た。また、ヒロシマが教育の場でどのようにとらえられているかを国ごとに調べ、それぞれの違いについてデータや資料をもとに意見を英語でまとめた。（英語科・2学期）

高い評価を得たチームは、実際に SSES を訪問し、直接プレゼンテーションを行い、交流した。また帰国後、校内で、フィードバックの機会を設けた。（英語科・3学期）

核兵器に関する文学作品「黒い雨」とハリウッド映画を取り上げ、現代日本における核兵器への意識を考察し、その表現方法の違いについて学んだ。（国語科・2学期）

③ Wars and Conflicts

高校1年生対象・3学期。平和に関する学びのまとめとして、地球社会が抱える諸問題のうち Wars and Conflicts をテーマとし、6つの教科分野からのアプローチ（政治・経済・現代社会的アプローチ、歴史・倫理的アプローチ、理科・数学的アプローチ、芸術的アプローチ、保健体育・家庭科的アプローチ、国語的アプローチ）から対処法を探った。クラス内で、アプローチごとにグループに分かれ、課題解決の方向性について、英語で意見をまとめ、発表する機会を設けるとともに、個人でのエッセイにまとめた。また関連する内容として、現代社会の存在するさまざまな Conflicts（主に途上国と先進国間のもの）について読み、考えを深めた。（英語科

3 学期)

④ Social Justice and Service Learning

高校 2 年生対象・年間。国際社会における様々な問題（人権・エネルギー・環境など）について家庭科・現代文・化学・生物・地理・世界史の授業で専門的に学び、それを英語の授業で統合し、発信した。今年度は、①児童労働、②水、③エネルギー政策、④イスラム、⑤生物多様性を取り上げた。（英語科年間）

また、各授業で学んだ諸問題に関係した社会貢献活動を各人で計画し、実行するプロジェクトを行った。実行したプロジェクトは、学内で報告し、検証する機会を設けた。（総合的な学習の時間・年間）

⑤ 修学旅行プロジェクト

高校 2 年生希望者対象（学年の 70%が参加）・2 学期。中国への修学旅行において、現地の高校生との交流事業を実施した。互いの文化を紹介する時間を生徒主体で行い、それぞれの文化的背景についての理解を深めた。また、1 対 1 での交流も重視し、英語でのコミュニケーションの機会を設けた。

⑥ Write for the Future

高校 3 年生対象・1 学期。これまでに学んだグローバル・イシューや地球社会への貢献に関する知識や経験をもとに、テーマを設定し論文を作成し、発表した。

⑦ 高校生会議

全学年希望者対象・SGH 最終年、年間。本校における SGH の取組の総仕上げとして、2018 年 7 月 24 日から 28 日まで、渋谷幕張高校と共催で国際高校生会議を行う。この会議では、五大大陸にまたがる世界 18 か国のトップ校から選抜された 107 名の高校生に日本の SGH 校の高校生 32 名も加わって、水資源問題という世界共通の大きな問題について考える。それぞれの学校が自国の抱える問題とそれに対する取り組みを互いに紹介し合ったり、首都圏の水関連施設の見学をしたりして現状を深く理解した後、将来に向けて地球規模で何ができるかを考察する。目的は、若者の視点による解決策を編み出すことである。この会議はシンガポールとオランダに

続き、日本が 3 回目の開催となるが、渋谷教育学園では、保護者の多大な協力もあり、外国人高校生全員がそれぞれ生徒の家庭にホームステイすることになった。また生徒主体の会議にしたいという思いから運営ボランティアを募集したところ、MC・施設見学でのガイド役・資料翻訳といった英語系の職種だけではなく、装飾などデザイン系の職種、誘導・設営・PC サポートなど縁の下の力と言える職種に至るまで 250 名を超える応募があった。運営に関わらない生徒に対しても水問題についての授業や会議の結果を共有する機会などを設け、全校での取り組みとする。

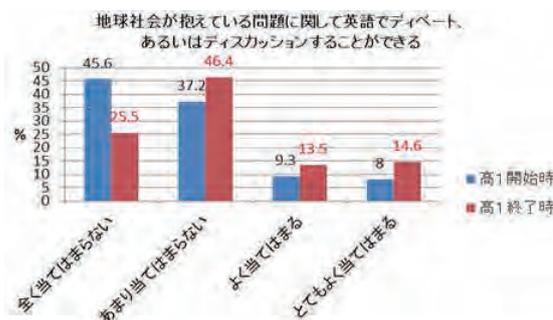
連携大学による協力

英語授業での生徒の討議や作成物への支援として、連携大学である東京外国語大学の大学院より TA として、留学生を招き、継続的にグループ討議に参加する機会を設けた。また、評価にも加わり、授業の進め方など多方面にわたり、指導・助言を得た。

アンケート（2018 年 3 月実施）分析

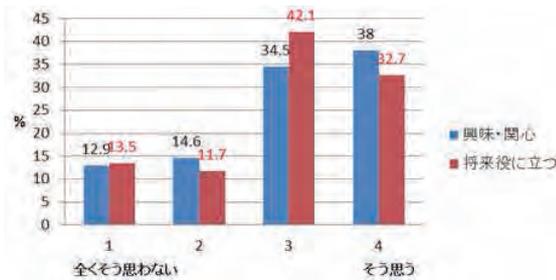
生徒には、①授業アンケート②SGH アンケートの 2 種類を実施し、その成果を分析した。

結果、多くの生徒が授業の成果として、英語運用力が身につけていると感じていた（図 1 参照）。



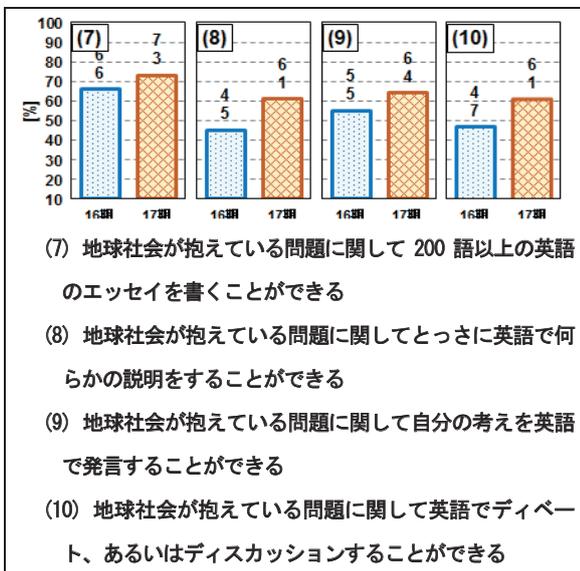
▲図 1 高校 1 年生（SGH 第 4 期生）英語運用に対する自信

また、東京外国語大学大学院の留学生による授業支援は、評価している生徒が多く、継続的な支援をすることで、活発な討議につながり、発信力の育成につながる事が確認された（図 2 参照）。



▲図2 高校1年生 (SGH 第4期生) Hiroshima Brochure Project

SGH 1期生に比べ、2期生の方が、英語運用力に対して自信を持っている生徒、これまで学んだ知識やデータの活用力が将来有用であると考えた生徒、地球社会に貢献したいと考える生徒の割合が増えた(図3参照)。



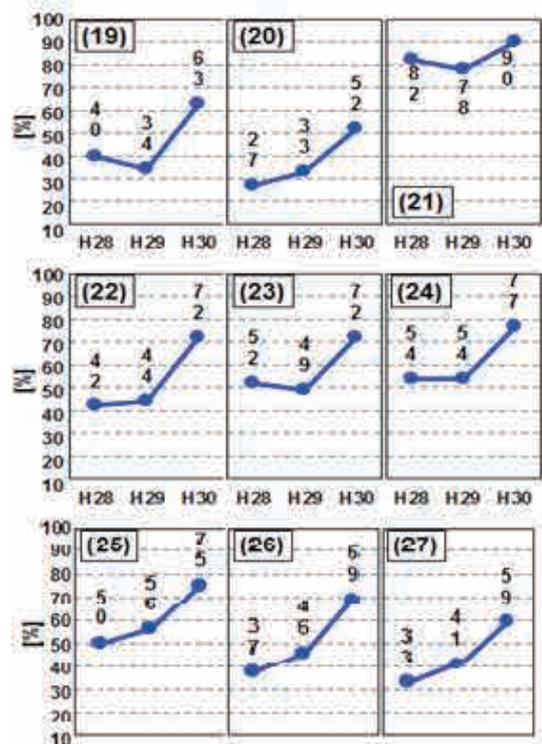
▲図3 SGH 第1、2期生 (高3次) 英語運用力についての自信

これは、この4年間に渡るSGH授業開発の中で、年々、教科の連携がスムーズになり、共有する内容が深まって、プログラムの精査が進んだ結果、学びの方向性がより明確に生徒へ伝わり、更に授業への意欲・理解が深まった結果であると考えられる。

第2期生の3年間における意識の変化を見ると、本校SGHが目指してきた「行動できるリーダーの育成」に関する取組みが、ある程度の成功を見たと考えられる。特に「自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」と考える生徒は、2年連続で90%となり、生徒たちが様々な活動を通して、アイデンティティや興味関心を確立したことを

示し、自己肯定感を高めていながら、自己のキャリアに向き合っていることがうかがえる(図4参照)。

H28: 高1 修了時(H28.3), H29: 高2 修了時(H29.3)
H30: 高3 修了時(H30.3)



- (19) 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい
- (21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。
- (22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。
- (23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。
- (24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができるとをしたい。
- (25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。
- (26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。
- (27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。

▲図4 SGH 第2期生 3年間における意識変化